言語文化教育研究学会第１回研究集会　口頭発表　概要

「留学生チューター活動」の企画、実践、省察の過程にみる同僚性

山本晋也（徳山大学）

「同僚性」とはいかなる概念か、そして、それはある教育組織の中で、どのように形作られていくのだろうか。本発表は、上記の問いに対して、発表者の所属する教育機関にて実施された「留学生チューター活動」(以下、チューター活動)の実践事例に基づき、考察するものである。

本発表で取り上げるチューター活動とは、主に教職課程を履修する日本人学生と、入学直後の外国人留学生(以下、留学生)がペアを組み、半期(約３ヶ月)の間、日本人学生が留学生の言語支援を始めとした大学生活全般のフォローアップを行うものとして、試験的に実施された活動である。この活動は、大学の留学生支援担当の事務員(以下、事務 A)、および教職課程担当の大学教員(以下、教員 A)、そして、私山本の３名の合議により企画、運営、実施された。その背景にあったのは、三者に共通する「大学内の日本人学生と留学生の交流を通じて、留学生の日本語の学びを促したい」という思いであった。

教育機関における「同僚性」について、秋田（2007）は「求めるべき教育への共通の展望をもち、共に仕事をしていく関係」（p.208）と述べる。この定義に従うならば、チューター活動に関わる事務 A、教員 A、山本の三者の間には「留学生の日本語の学びを促す」という共通の展望があり、同僚性をまとった集団であったと見ることができる。だからこそ、大学という組織の中でそれぞれ立場の違う三者がひとつの実践を協働して企画、運営できたと見ることもできるだろう。だが、チューター活動を実際に企画、運営する過程においては、「この活動にどのような成果を期待しているのか」「そのために誰がどのような役割を担うのか」といった具体的な活動の理念や形態において、三者のそれぞれに少しずつ認識のずれが存在していた。そのため、チューター活動の企画、実践、省察という一連の過程において、その都度、活動の理念や形態について、打ち合わせを重ねる必要があった。

本発表では、こうしたチューター活動の企画、実践、省察という一連の過程を振り返り、実践との関連の中で教育機関における「同僚性」のもつ意味について考えたい。

＜参考＞

秋田喜代美（2007）「教師の生涯発達と授業づくり」『改訂版授業研究と談話分析』pp.216-228，放送大学教育振興会